

詩歌にみる「住まうこと」の風景：
福井の歌人・橘曙覧などを通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川本, 豊, 市川, 秀和 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00028615

詩歌にみる「住まうこと」の風景

— 福井の歌人・橘曙覧などを通して —

Topo-logical Study of Dwelling in the Japanese poetry
— According to the *Tachibana-Akemi's* poem and the like —

川本 豊*
(福井工業大学大学院 博士後期課程)
市川 秀和**
(福井工業大学建築土木工学科)

1. はじめに — 「住まうこと」と「さすらうこと」 —

日本古典文学作品をテキストに、「住まい」に関する表象を取り上げ、増田友也の先行研究の示唆に拠りつつ、そこに表れる空間現象の様相の建築論的考察を行なってきた⁽¹⁾。その視座として、住まいの内部という「奥」へ向けた水平的な次元を一方に置き、もう一方で当時の人々の、住まいにおける行為や精神性（すでに意識ということを超えて、もはや共通認識として敷衍化されていることを前提として、ここではそれらを住まいに対する「心性」と呼称する。）の表象という垂直的な次元とも交叉しつつ、テキストの時代性を尊重する独自の考察を巡らせてきたことを特記しておきたい。

さて「住まひ」という古語は、《スミ（住）アヒ（合）の約》であるとし、生活し続ける、ずっと住む、あるいは一緒に生活するという、コト（行為）の意がまず上げられ、その後モノ（住居）の意が添えられている⁽²⁾。さらに「住み・棲み」については、あちこち動きまわるものが、一つ所に落ちつき、定着する意とし、スミ（澄）と同根とする。つまり「澄み・清み・済み」は、浮遊物が全体として沈んで静止し、気体や液体が透明になる事態であり、「住み・棲み」という一連の行為が意味する本質を考察する上で示唆深い。

そこで建築史家・西和夫は、日本人は建築についても実に多くの言葉を作り出したとして、「住む」という言葉のバリエーションを列挙している⁽³⁾。その中で、「ずっと住み続ければ住住むあるいは住渡るであり、それを住着くとも言う。」（下線、引用者）と指摘する。この「住（すみ）-住（す）む」という言葉の重なり、あるいは行為の重層化は、本稿にとっても重要な指摘である⁽⁴⁾。

さらにこの「住住む」という言葉に対照する現象として「さすらう（あるいは、漂泊）」という言葉に着目する。これについて、哲学者・グッツォーニは「私たちが空間をさすらい巡り、道を行くとしても、それは、私たちが住まうことを排除するのではなくて、住まうことを包み込んでいる。⁽⁵⁾」と述べ、移動し通り抜ける空間の内に住まうことが「さすらう」であるとする。つまり「さすらう」という現象も「住む」という一連の行為のなかに捉え直すことが出来ると考えられるのである。

本稿では、「住まい」に「住まう」ことについて、次いで「住まい」を持ちえないで還るところなく「さすらう」ことの現象について、建築論的な考察を巡らせる。前者には、福井の歌人である橘曙覧の詠歌を通して、また後者には、信濃地方を漂泊した俳人とされる井上井月の発句から、日本独自の短詩型に表れる、それぞれの作者が切り取った「詩の言葉」を通して、そこから立ち現われる住ま

(キーワード：住まう、風景、建築論、橘曙覧、井上井月)

* Fukui University of Technology (910-8505 Gakuen3-6-1,Fukui)

** 福井大学地域環境研究教育センター・学外協力メンバー Fukui University of Technology (910-8505 Gakuen3-6-1,Fukui)



図1 橋 曙覧 (1812~1868)



図2 井上 井月 (1822~1887)

うことの風景を探ることとしたい。なお、橋曙覧(図1)と井上井月(図2)とは、地理的に離れており、とくに接点は認められないが、時系列的には、幕末というほぼ同時代を生きたと見える。

2. 「住まうこと」と建築論 —増田友也から田中喬へ—

本稿にとって重要な先行研究について、前もって触れておきたい。

京都大学を拠点とした武田五一や森田慶一を初発とする建築論の多様な研究とその系譜がある⁽⁶⁾。この中で「住まうこと」を建築論の主要テーマとした増田友也の思索は、初期の住まいの空間論から中期の風景論へと展開したと考えられているが、その過渡期の論考に「住宅はまず それを存在せしめている場の 自然的な もしくは歴史的なトポグラフィにおいて 即ちその風景において 位置づけられねばならぬ。⁽⁷⁾」(傍点、引用者)と論及し、すでに「住まうこと」における「風景」への視座が確認されよう。増田の思索はその後、後期の存在論へと深められ、さらに次世代へと継承された。

そこで増田の高弟・田中喬は、アリストテレスの制作論から建築論研究を開始したものの、後年は、日本の詩歌を取り上げて新たな建築論の領域を切り拓いたと言える。田中は、「住まうこと」の現象のなかに「うつすこと」(写す、映す、移す)の言葉を敢えて当て⁽⁸⁾、増田のいう「風景なるもの」へ、独自に踏み込もうと意図したと考えられるのであり、その重要な論及箇所を次に引用しておきたい。(引用文における下線は引用者、以下同じ。)

心・身は、家に宿り、宿る仕方の原像、原型に他ならない。心は身に、身の家に映り、宿るのである。意味が言葉(音声)に映り、宿るように、そのように写されて宿るのである。(中略)心は家に生き、家を生きている、家を表わしている。そのかざりで、この原基的な、原尺度的な心・身のあり方に拠って、外なる家屋に宿り、風景に宿り、天地に宿るという、写しつつ宿るという、それぞれの宿り方、写し方が何れか保証されるのであろう。(p60)

心・身に踏み込んだ東洋的身体論として、「宿る(住まう)」に、「うつす」という言葉を密接にかかわらせるという新たな視座から「風景」という現象を切り拓くことが目論まれ、ここに田中の建築論の独自性の一つをみるのである。

田中は、さらに良寛の和歌をとりあげ、「住む」と「写す」との関係を次のように述べる。

やまかげの岩間をつたふ苔水のかすかにわれはすみわたるかも

水は我を映し、我は水を映す。融一しつつそれぞれに映し合い、写し合う。そしてまた、澄みわたった我もなき私の心は、固く言えばそれ自体は不可視不可触なものとして、それは岩間をつたふ苔水としての可視可触のものにおのずからに表出されているのであるとも思われる。私たちにとっての「写す」ことへの関心は、こうした相互の映し合いのとりわけその一方に、即ち我から水への写しにかかわっているのである。澄みきって「住む」ことへの着目は、ここではこのようにしての「写す」ことへの注目を促すのである。(p101)

また、「住居」という場所についても、この「うつす」と関連付けて次のように言及する。

「住居」は、場所としての「住居」は、「人生」において開かれるところである。開かれたところに、人は宿り、宿りつつ写すのである。写しつつ宿るのである。森の木下も、里の大路も、そして乞食に立ち止まる家々の軒端もまたそのような場所である。(p154)

本稿では、これまでの研究成果を基底とし、建築論における、こうした増田から田中への展開をふまえた上で、「うつす」という田中喬の新たな視座を手がかりに、住まいを包み超えた「風景」の現象から「住まうこと」の実相の一端を考えてみたい。その際、冒頭で触れた「住まうこと」と「さすらうこと」の対照的な行為を「住」と「漂泊（非住）」と言い換え、捉え直すこととする。

まずこの「住」のテキストとして、幕末の国学者でありかつ歌人としても知られ、福井の人である‘橋曙覧’（たちばなのあけみ）の和歌を取り上げる。

これに続いて「漂泊」は、住まうことを離れて、さすらい、心・身を移し漂わせる行為にほかならないが、同様な意味を持つ「放浪」という言葉は敢えて使用しない⁽⁹⁾。「放」と「漂」のそれぞれの語義⁽¹⁰⁾とに鑑み、また建築論的にみて場所的意味の「泊—まる」を重視することに拠る。なおテキストは、信濃地方を漂泊した‘井上井月’（いのうえせいげつ）の発句である。

さらに、もう一つ付け加えると、前者の橋曙覧における「住」（住住む）に対し、後者の井上井月の「漂泊」を、あえて対概念としての「非住」と捉えることにする。

3. 「住まうこと」の風景（1）— 「住」の視点から —

3.1 橋曙覧と藁屋について

橋曙覧（1812～1868）は、越前福井城下の老舗商家である正玄家に生まれた。この正玄家は橋諸兄にゆかりの家柄とされ、後に曙覧が橋姓を名乗ったのもこれによるとされる。嫡子であり一旦家業を継ぐのであるが商いには向かず、若くして異母弟の宣に家督を譲り⁽¹¹⁾、足羽山‘黄金舎’に隠居する。さらに37歳の時に黄金舎から三ツ橋に引越し‘藁屋’と称し、ここで終生を過ごすことになる、つまりここが「終の棲家」となった。晩年、藩主の松平慶永（春嶽）が野遊びのついでとして、この藁屋を訪れているが、藩主が武家でもない庶民宅に直截出向いて対面するということは当時としては異例のことであり、当然のことながら曙覧は大いに感激しその歌を詠んでいる。この際に、春嶽はこの「藁屋」に対して‘忍ぶの屋’とあらためよとわざわざ屋号を授けている。しかし畏れ多いこととして、曙覧自らが用いることはなかったとされている。もちろんこの両者の関係は、平田篤胤の流れをくむ福井藩士中根雪江の仲立ちがあつてのことではあるが、春嶽はその清廉な生きざまから曙覧を重用し、破格の扶持米を与えているのである。

では春嶽の目に「映る」藁屋とその風景は、如何なものであったろうか、春嶽の記述から引用する。

ちいさき板屋の浅ましげにて、かこひもしめたらぬに、そこかしこはらひもせぬにや、塵ひぢ山をなせり。柴の門もなく、おぼつかなくも家にいりぬ。（中略）すこし広き所に入りて見れば、壁は落ちかかり、障子はやぶれ、畳はきれ、雨もるばかりなれども、机に千文八百ぶみうづたかくのせて、人丸の御像なども、あやしき厨子に入りてあり。（中略）屋のきたなきこと、たとへむにもなし。しらみてふ虫などもはひぬべくおもふばかりなり。かたちはかく貧しくみゆれど、其の心のみやびこそ、いといたはしけれ。

松平慶永「橋曙覧の家にいたる詞」（『橋曙覧全歌集』岩波文庫 pp16-17）

かくやというほどの辛辣な記述である。もちろん藩主という高貴な御仁の目からではあるが、現実にもそう大差はなかるうと思われる。それは後述するが、曙覧自身の目にもほぼ同じように「映って」いたことが確認できるからである。しかし名君といわれた春嶽であり、すぐ後にこう続けている。

おのれは富貴の身にして、大廈高堂に居て、何ひとつたらざることなけれど、むねに万巻のたく

はへなく、心は寒く貧しくして、曙覽におとる事、更に言をまたねば、おのづからうしろめたくて顔あからむ心地せられぬ。(p17)

体裁上は思いつきの訪問とはいえ、ここに春嶽が映しみた藁屋に曙覽の境涯の風景が現れており、曙覽そのひとにいかにより目置いていたかが、うかがい知れる。そして「住まうこと」と「生きること」の深層を契機に「詠うこと」へ、さらに「風景なるもの」への洞察の重要性が垣間見える。

3.2 「独楽吟」にみる写し取られた風景

橋曙覽は元号が明治に変わる直前に没したが、その嗣子・橋今滋が明治11年に公刊した『橋曙覽遺稿 志濃夫廼舎歌集』によって世に知られることとなった。旧来からの作法に則った和歌とともに、「これまで歌語として使われていなかった卑近な日常語を使いこなし、口語的な発想によって有りのままの生活を有りのままに歌い⁽¹²⁾」(傍点、引用者)こむ斬新な作風は、かの正岡子規が万葉以来と絶賛するところとなり、いわゆる明治期の和歌革新運動の先駆ともされている。その白眉が、上記遺稿歌集のうち「春明艸 第三集」に収められている「独楽吟」と呼ばれる52首であろう。「たのしみは」ではじまり、「～とき」で結ぶという、ある意味で俗な形式をとっている⁽¹³⁾。その中から「住まうこと」を詠み込んだ歌を、一部であるが次にあげてみたい。

- | | | | | | | |
|-------|---------|-------|---------|---------|--------|-------|
| たのしみは | 艸のいほりの | 庭敷き | ひとり | ころを | 静めをるとき | (553) |
| たのしみは | すびつのもとに | うち倒れ | ゆすり | 起こすも | 知らで寝し時 | (554) |
| たのしみは | 妻子むつまじく | うちつどひ | 頭ならべて | 物をくふ時 | | (558) |
| たのしみは | 空暖かに | うち晴れし | 春秋の日に | 出でありく時 | | (560) |
| たのしみは | 朝おきいでて | 昨日まで | 無かりし花の | 咲ける見る時 | | (561) |
| たのしみは | あき米櫃に | 米いでき | 今一月は | よしといふとき | | (566) |
| たのしみは | 昼寝せしまに | 庭ぬらし | ふりたる雨を | さめてしる時 | | (577) |
| たのしみは | 昼寝目ざむる | 枕べに | ことことと湯の | 煮えてある時 | | (578) |
| たのしみは | 家内五人 | 五たりが | 風だにひかで | ありあへる時 | | (582) |
| たのしみは | 機おりたてて | 新しき | ころもを縫ひて | 妻が着する時 | | (583) |
| たのしみは | 三人の児ども | すくすくと | 大きくなれる | 姿みる時 | | (584) |

このように平凡な暮らしや家族の日常が、平易な言葉となって現れ、その住まうことの事態が詠まれているのである。今日では当然のことであるが、公文書などが漢文調の文語文であったときに、このような斬新な手法をまさしく「発見」した曙覽の先進性が、さきにもみたように子規らを驚愕させたのであろう。そこには一家の生活の風景が、言葉によって写し取られているといえる。それも藁屋とはいえ、なにあらう我が家なのである。この住まう場所としての「我一家」ということが、ふつふつとこれらの歌群に表象された言葉からうかがい知れるのである。たとえば、なにげない昼寝という現象(577、578)からは家内での安らかなひと時の時間経過が、あるいは一晩の時間経過(561)が、あるいは季節の経過(560)が、住まうこととして、それがたのしみとして詠われている。そしてさらには家族みな平穩(558、582、584)が高らかに詠まれる。しかし、曙覽はこれまでに三人の娘を幼くして亡くしている。三女健子がようやく4歳になったとき痘瘡で亡くなり「きのふまで 吾が衣手に とりすがり 父よ父よと いひてしものを(20)」と、親としてもっとも悲しい出来事に対する慟哭の歌を詠んでいることを抜きにして、これらの歌はあり得なかつたであろう。ここに住まいに「住まうこと」と「生きること」とに通底するもの(風景なるもの)を見落としてはならないのである。

3.3 「住まうこと」と「詠うこと」

さきに、藩主の松平春嶽が映しみた一庶民・橘曙覧による藁屋の「境涯の風景」を確認した。では曙覧本人は、その「我が家」と呼ぶ場所に我が家族とともに身を寄せて「住まうこと」が何よりの悦びであり、それはあばらなる伏せ屋を超越した心性（精神性）であろう。そして曙覧は、「我が家」に対してどのように「詠うこと」を求めたのか。「独楽吟」とは異なる歌の中から、選び出してみたい。

- あばらなる 屋戸はやどにて すみわたる 月は我にも さもにたるかな (14)
 春雨の もるにまかせて すむ庵は 壁うがたるる おそれげもなし (23)
 薄しろく なりてたまれる 雪の上も 汚さで一日 見る庵かな (68)
 けぶり艸 それだに煙 立てかねて なくさめわぶる 窓のつれづれ (92)
 人は皆 見さして寝たる 小夜中の 月を静かに 入るる窓かな (121)
 羽ならず 蜂あたたかに 見なさるる 窓をうづめて 咲くさうびかな (308)
 壁くぐる 竹に肩する 窓のうち みじろぐたびに かれもえだ振る (328)
 窓くらく にはかに成りて 在り明けの 月をよこぎる 郵しぐれかな (392)
 賤の夫も 生けるしるしの 有りて今日 君来ましけり 伏せ屋の中に (620)
 客人も あるじも身をぞ 縮めをる 下冷えつよき 狭き屋のうち (657)
 山里と いへどうるさき ことまじる ただ吾が廬を 出でざるがよし (676)
 霜のうへに 冬木のかげを うす黒く うつしてふくる 庭中の月 (681)
 艸の庵 さひづりめぐる 朝すずめ 寝みみに聞きて 時うつすかな (806)
 窓に入る 雨夜のほたる しめじめと 照りて簾を おりのほりする (820)
 板井汲む つるべの音も かずそひぬ 我もおき出でて 庭の花みむ (903)

最初の14番歌にあるように「あばらなる」と詠みかけており、決して建物として立派な住まいであるとは自身でも認めていないことは間違いない。しかしそのあとに「すみわたる月」と比較しているところからもそれに頓着している気配はまったく感じられず、物理的な建物を求めているようである。たとえば、328番歌の詞書きには「ひた土に莚しきて、つねに机すゑおく、ちひさき伏せ屋のうちに、竹生ひいでて、長うのびたりけるを、其のままにしおきて」とあり、土間に机を置いて書斎としていたようで、そこから竹が伸びてきたがそのままにしておいたとある⁽¹⁴⁾。曙覧が親しく求め、詠う「我が家」、あるいは「住まうこと」の風景とは、いったい何なのであろうか。

我が家に我が家族とともに住まうことが許されて、その平凡な日常に満ち足りており、煙草銭に困ったり(92)、冷え込んだ時には客人にも辛い思いをさせたりと(657)、外目には決して豊かで安楽とは言えないであろうが、逆にそれを楽しんでいるようにも見て取れる。さらには、静寂と一見思える山里でさえ敢えて距離を置き、我が家(廬)に居るのが一番(676)とさえ詠むのである。これは鴨長明『方丈記』⁽¹⁵⁾にある方丈草庵に対する心性と通底するものが認められよう。

ここであらためて、先の春嶽が藁屋を訪れた時の記述の引用を踏まえ、その時の曙覧の詠歌(620)に敢えて着目すれば、それは遺稿歌集のうち「君来艸 第四集」の冒頭歌となっている。ここでも自ら「伏せ屋」と詠み、これは決して謙遜ではなく率直な本音と受け取ってよい。むしろ曙覧の詠うことを強く促したのは、最後の「の中に」という言葉に集約されている。名君といわれる藩主がこともあろうに、我が家に、そして住まいの中に、まさしく自分の内(奥)に入り込んだのである。これほどの感嘆に満ちた経験を「詠うこと」、それは「生きることの風景」をとらえることであろう。

3.4 小結

「住まい」に「住まうこと」の事態を詩歌の世界に認めて、ここでは我が家に住まい、そのことを「詠うこと」が可能であった事例として、橘曙覧の遺稿歌集をテキストに考察し、生きることの風景を垣間見た。

そこには自分の住まいという確かな住処を持ち得た者が、高らかに「詠うこと」の喜びの心性を認め得たのではないか。それは貴賤や伏せ屋などにかかわらず、自らの住処ということにつきるのであろう。それほどに住まいに「住まうこと」の、人にとっての意味の大きさが認められるのである。

最後に、曙覧の歌から、国学者・平田篤胤につながる独特な視点を取り上げておきたい。

人の目に 見えぬ高山 短山 神のいほりを 覘くよしもが (719)

体といふ 宅はなるれば 天地と 我の間に 垣一重なし (720)

天地の 間に隔て なき魂を しばらく体の つつみをるなり (721)

物皆を 立つ雲霧と 思へれば 見る目嗅ぐ鼻 幽り世と同じ (722)

幽顕 一重の蟬の 翼もさへず 人の臭いもたぬ 吾がまなこには (723)

この中から720番歌に限定すれば、天地の「間」にこそ、人は住まうのであり、冒頭の先行研究で紹介した田中喬の建築論に通ずるであろう⁽¹⁶⁾。さらに続いて、体(たい・から)を宅(たく・いへ)ととらえるなら、仮の住まいの実相が詠われていることになる。ここに風景なるものへ踏み込まなければならぬ問題が定位されているのである。

4. 「住まうこと」の風景(2) — 「非住」の視点から —

4.1 「漂泊」に生きた井上井月と「詠むこと」

井月こと本名・井上克三は、1822年(文政5)越後長岡の生まれとされ、没年は1887年(明治20)新暦で3月10日、享年66歳となる。出自は武家であったらしく、江戸や京都で和漢の学問を修め、昌平黌にも関係があったようで、この時期に身に付けた教養が後半生を助けることになる。またこれも推測の域を出ないが、江戸出仕中の1847年(弘化4)に発生した善光寺大地震で在郷の一家妻子をすべて失ったとも伝えられている⁽¹⁷⁾。このような身の回りに起こった境遇が、後年の何にも執着しない漂泊の人生と無縁でないことは想像に難くない。

また青年期から松尾芭蕉に私淑し「幻住庵記」⁽¹⁸⁾を誦んじており、芭蕉の足跡などを求めて全国を行脚したようであるが、各所に「庵記」全文の揮毫が残されていることからそれが確認できる。30代後半に信濃の伊那谷に入ってから、一定の範囲内(現在の地名では、南は飯田市から伊那市、高遠町、箕輪町を北限とした周辺の村々であり、それなりの広がりがある)を移動し、結局、終生この地に留まることになる⁽¹⁹⁾。この点では師と仰いだ芭蕉や西行などとはやや異なる生き方の次元といえよう。

井月を世に知らしめたのは、伊那出身で東京に出奔して医者になった下島勲(空谷)である。1922年(大正10)に下島勲編『井月の句集』が自費出版され、その後ろ盾になったのが、下島が主治医を務めた芥川龍之介であった。当時未整理であった句をみた芥川は、たちまちその才に魅かれ、出版に際してその跋文を書き、虚子らに巻頭句を求めている。芥川は其中で、井月の書技を「入神と称するをも妨げない」として絶賛しており、伊那での乞食生活を支えたのもこの達筆の書が一助であったことは間違いないであろう。

こうして井月は、各所で発句を詠み、短冊をしたため、揮毫し、その対価として食事や宿を与えられるという漂泊生活の故から作品が散逸し、その結果、上記の句集に竄入句が後日発見されるなど、今日でも未だその編纂作業は継続している。

このように漂泊の俳人という言葉で象徴される井月は、特定の居処という空間的存在のみならず、その人生という時間的存在も同様に漂泊していることから、多くの謎に包まれている。「住まうこと」を時空的に超え「生きて詠むことを漂泊した」といわれてよい井月ゆえに、芭蕉を生涯の師としつつ、時代的には小林一茶と正岡子規をつなぐ稀有な俳人であろう⁽²⁰⁾。井月が書写して座右の書としていた『俳諧雅俗伝』⁽²¹⁾には「只有の儘に打聴ゆるが上手のわざなり」とあり、後年、正岡子規が提唱する「写生句」にすでに先行していたと思われるが、これについては後述する。

4.2 井月の発句にみる風景

まず言葉の持つ対象化の作用（主体と客体）に留意しつつ、言葉「うつす」が直截的に表れる井月の発句をみておく。

- ・ 盃洗に散影うつる桜かな (春・313)
- ・ 地に影をうつして風の柳かな (春・349)
- ・ 藤さくや遠山うつす池の水 (春・379)
- ・ 姿鏡にうつる牡丹の盛りかな (夏・625)
- ・ 姿鏡に映る楓の夕日かな (秋・937)
- ・ 蓬萊のうつる夜明けの障子かな (新年・1238)

この「うつす」という言葉で詠まれた行為の働きが、「うつすもの」(主体)と「うつされるもの」(客体)を分節(対象化)しつつ、かつ相即的な現象を開くことに着目したい。

そこで最後の句(1238)を例に考察すれば、「うつすもの」が「障子」であり、「うつされるもの」が「蓬萊」ということになる。これは正月の句であり夜明けの障子に映ったのは、縁起物の蓬萊飾りが初日に照らされた影であろう。井月はこの「うつす」風景をどこからみて捉えたのかは定かにしてはいないが、ここではやはり「外から」みて捉えたと考えたい。すると、新年の平安を祈る家人たちが室内にいたことがみえてくる。漂泊の身である井月はその中には入ることは許されない。なぜならそれが自分の選びとった漂泊の在りようであるからである。よってこの句には表面的にはさしたる感慨は表われていない。いつものように飄々と有りのまを写し取って詠んだものと考えられる。つまり常套的な写生句に相違ないが、井月の境涯を考慮に入れるならば、その奥にある心の写しの現れを見落としてはならない。だからこそ、障子に「うつるもの」は何か問題となるのである。

次に「住まい」(家)とその風景に着目する。上と同様に、直截的に住まうことの現象が表現されている発句を通して読み解くことにする。そこで住まいを表象する一つである「窓」に注目するならば、これは「内」と「外」をつなぐ中間領域(半-隔離)の働きがあり、数多く詠まれている。内から外をみた近景として窓(間戸)の風景から、徐々に遠景へと視点の範囲を拡げながら句を列挙したい。まず近景の「窓」(建具)の句から考察を行う。

- ・ 長閑さや鳥影のさす東窓 (春・3)
- ・ 恋すてふ猫の影さす障子かな (春・114)
- ・ 梅が香や大事の月の窓へさす (春・178)
- ・ 梅が香や妻戸の内の咳ばらひ (春・179)
- ・ 梅にさす大事の月よ庵の窓 (春・191)
- ・ 散しほや梅の小窓の細めなる (春・202)
- ・ 散込やさくらの窓の細めなる (春・251)
- ・ 青柳や小窓のほしき家の向 (春・334)
- ・ 蓮の香や客座清める片すだれ (夏・641)
- ・ 窓一つ思ひのまゝや冬籠 (冬・1084)
- ・ 切り張のよくも届て冬牡丹 (冬・1158)
- ・ 御降りの晴間覗くや庵の窓 (新年・1237)

「窓」⁽²²⁾は、先の「うつす」と同様に、その「内」と「外」を分節しつつ相即的な両義性に拠るならば、内から外を見る・窺う、逆に、外から内を覗き見る(見られる)ことになる。井月は基本的には後者である外から内、つまりは窓の内としての家の中を眺める位置に居ることになる。そして

「(小) 窓の細めなる」と云う2つの句(202・251)でも外からの様子であろうが、花にあわせたその開け様において、その家の内に居る人の心の在りようが映っていると詠んだのであろう。

次いで窓の内から外へ、少しずつ視点を引きながら、徐々に遠景に至る句を以下に並べてみる。

- ・行春を惜む三階の灯かな (春・18)
- ・淡雪や軒に干したる酒袋 (春・67)
- ・時めきし玄関櫃や初松男 (夏・587)
- ・まつ宵やもの学びする軒に寐し (秋・792)

- ・表から裏から梅の匂ひかな (春・176)
- ・誰が門ややみに匂ひの梅しろし (春・177)
- ・ひとつ星など指して門すゞみ (夏・451)
- ・梅が香をやらじと結ぶ垣根かな (春・190)
- ・卯の花に三日月沈む垣根哉 (夏・645)
- ・秋も未だ暑し裏の戸おもての戸 (秋・723)
- ・霜の菊酒かもす家の暖かさ (秋・964)
- ・初冬や庵のあたりを去らぬ鳥 (冬・978)
- ・時雨れても中なかぬくき庵かな (冬・1008)
- ・梅の有裏からさして初日影 (新年・1215)
- ・いふ事の隣へもれて夏の月 (夏・434)
- ・河豚やひそひそ咄壁を洩 (冬・1147)
- ・初鶏やはり合になる壁どなり (新年・1285)

- ・畑打や腰のして見る鬼瓦 (春・100)
- ・奥底もなき家作りや心太 (夏・531)
- ・小流れのとり巻く家や月涼し (夏・401)
- ・小家とも云はず寄りつく清水かな (夏・440)
- ・時雨来る榎が本の小家かな (冬・1019)
- ・夕顔や清水の里の仮住居 (夏・689)
- ・山笑ふ日や放れ家の小酒盛 (春・71)
- ・一と注連に睦み合けり長屋の戸 (新年・1242)

- ・のぼり立つ家から続く緑かな (夏・483)
- ・夜景色に富める家あり飛ぶ螢 (夏・610)
- ・迷い入る山に家あり蕎麦の花 (秋・920)
- ・月さゝぬ家とてはなき今宵かな (秋・744)
- ・行暮し越路や櫓の遠明り (冬・1098)

ここでは以上の句のなかから、特に遠景を詠んだ最後の2句(744・1098)についてみておきたい。まず「月」とは、自らの俳号にも採用するほど意味深く⁽²³⁾、そのような月が貴賤の区別なく村里の家々を照らしている。その風景をみて詠むとは、如何なることなのか。この里は、村人の住まう場所(住)であるとともに、漂泊に生きる井月にとっても身の拠り所となる場所であって、世話にならざるを得ない大切な場所(非住の住)にほかならない。月は、そうした村里に万遍なく光を降り注ぎ、外に在る井月の上にも同じようにと、月の光を通して、あらためて里を見遣る澄んだ我執のない心をつしているのである。さらに次の「櫓」とは炉や竈で使う薪のことであり、ここでは囲炉裏の埋火の明り

を实景として詠んでいるのであろう。しかし故郷とされる越後への途の遠さは、もはや距離感覚を超えている。帰るに帰れない心象の句（非住の風景）としてもとらえられているのである。

続いて、数は少ないが、家の中の風景を詠んだと思われる句を挙げておきたい。

- ・蛙なく夜の浅みや囃ひ風呂 (春・154)
- ・風呂に入る夜のくつろぎや鳴く水鶏 (夏・577)
- ・打返す枕に虫の遠音かな (秋・871)
- ・七草の宵や薺のもらひ風呂 (新年・1261)
- ・人の日や釜にこゝろの移る朝 (新年・1268)
- ・夜をこめし朝灯明や初鴉 (新年・1289)

これらの中でも第3句(871)は「枕」を詠んでいることに注目したい。漂泊の身で生きる井月にとって、久方ぶりの枕なのであろうか。そうした仮のやすらぎであっても、寝返って反対側の耳からも同じように、障子一枚隔てた「外からの」虫の音に聞き入ることができる。漂泊のいつもの夜ならば、「外において」虫の音に包まれて寝ていたのかもしれない。しかし今宵だけは異なって、誰やらの家の「内」で、枕にこの身を頼んでいるのである。風呂(154・577・1261)と共に、なんとも有り難いと感じることのできる偽らざる实景だったのであろう。

しかしながら、ここで井月の発句中に「わが庵(宿)」という語が見られないことの指摘が許されるなら、まさしく生きて詠むことを漂泊した境涯(非住の住の風景)であったと言わねばならない。

4.3 小結

ここでの最後に井月の辞世の句⁽²⁴⁾を取り上げれば、これも諸説あって定かではない。これが漂泊に生きた俳人としての真髓ではないだろうか。さらに当然ながら、井月の最期についてもいくつかの説があり、これも定かではないものの、現在の通説では、ある冬の暮れ、枯田の中に着の身着のままで行き倒れていたのを発見されて、身寄りの家に運ばれて(下の2句目に「窪溜り」と詠んだその家である)、しばらくしてそこで生涯を閉じたといわれている。旧暦にすると2月16日、奇しくも芭蕉と共に師と仰いだ西行の往生と同じ日であったとされる。

ともかく辞世の句について、次の4句があげられている。

- ・何処やらに鶴の声聞く霞かな (春・46)
- ・落栗の座を定めるや窪溜り (秋・929)
- ・涅槃より一日後るゝ別れかな (春・99)
- ・聞き夜も花の明りや西の旅 (春・299)

それぞれにその出典があるようであるが、まず第1句(46)については、臨終時に詠まれたものではない。ある春の時節に「辞世」をと促されて、筆を執ったのがこの句であるとされている。さらに他の3句も同じように臨終時の句とはいえないようである。現在でもまだ編纂的にはこのような状況であり、まさしく復本一郎のいう自己韜晦の俳人、あるいはもはや世俗という空間を突き抜けてしまっていたといえるのかも知れない。

そのような第1句を詳しくみると、3つの要素「何処やら」「鶴の声」「霞」があり、往時から、往生の標として、妙なる音楽、紫雲、薫香があげられている。そして鶴の声という妙なる音楽を聴きながら、霞を紫雲とみつつ、何処やらに迎えられているという見方も可能であろう。井月の境涯にとって相応しい「何処やらに」というのは、鶴の声と霞に導かれつつ往かんとしている、まさしく「浄土」という場所を指すのではないだろうか。本稿冒頭で提示した視座によるなら、漂泊という、空間的には、「水平方向」の移動にあけくれた井月は、どこかに鶴の声や霞に象徴される精神的な「垂直方向」

の志向性も持っていたのではないかと考えられよう。それを敢えて喩えるなら、中世への憧憬ともいえようか。中世の古典文学として有名な『源氏物語』に精通し、『枕草子』や『栄花物語』などにもふれていたことは、作句からもうかがえるからである。

5. むすび

これまでの考察から、「住まい（家）」をもつものが「住まうこと」における風景を、橘曙覧の詠歌から読み解き、次いで、「住まい（家）」をもたざるものが見た「住まうこと」の風景を、漂泊の俳人といわれる井上井月の発句から読み解き、「住まうこと」の多次元の実相の一端を考察したのである。それらを対照化して「住／住」と「漂泊／非住」と位置づけることが可能であろう。通常、住まいを前提とした「住まうこと」のみを考えるが、こうした対照的な「漂泊」を取り上げることによって、「住まうこと」の意味する深層が初めて明らかになると指摘できよう。

しかし、「漂泊という生活態度はなおも、住むということの十全な否定ではありえない。」⁽²⁵⁾と既に指摘されていることを考慮するならば、さらに漂泊における「非住の住」が開く住まうことの風景の深層へ踏み込まなければならない。

また本稿では触れられなかったが、「住まい」を一旦離れて再び「住まい」へ戻るといふ現象、つまり『萬葉集』以来、伝統的に詠まれてきた「旅」が表象する「住まうこと」については、別稿としたい。なお、これについては、本稿での「住／住」と「漂泊／非住」に対照するならば、「旅／不住」と位置づけられるものではなからうか。

つまり「住まうこと」の多次元の実相について「住－不住－非住」という3つの様態（現象）から、総合的に住まうことの風景をとらえる必要があると考えているからであり、今後の課題としたい。

註

- ・橘曙覧の歌の引用等は、水島直文・橋本政宣編注(1999)『橘曙覧全歌集』岩波文庫 によった。
- また「福井市橘曙覧記念文学館」編集による資料等も参考にした。
- ・井上井月発句の引用は、復本一郎編(2012)『井月句集』岩波文庫 によった。
- (本文中の上記書引用部の下線は、引用者による。なお、引用書にあるルビは省略した。)

(1) 川本豊・市川秀和(2019)「古典文学にみる「中の戸」の仕切りの建築論(3)」

日本建築学会大会(北陸)学術講演梗概集など。

(2) 『岩波 古語辞典』補訂版、1990年。

(3) 西和夫(2009)『建築史から何が見えるか 日本文化の美と心』彰国社、p155。

住んでいる様子は住向き、あるいは住振りという。家に入り込んで生活すれば住込み、住みにくいのは住悪しである。住んでいた家を捨て、荒れたままにするのは住荒す、一定の住所に落ち着かずほかへ浮かれ出るのは住浮かる、住み心地の悪いのは住憂し、それゆえ引越せば住替えとなる。ずっと住み続ければ住住むあるいは住渡るであり、それを住着くとも言う。住み慣れた顔は住着顔、住んでいる人は住手、住むところは住所あるいは住場所、長年住めば住古す、多人数がひと所にいっぱいになって住めば住満つ、住んで思い悩み、住みづらく思うのは住侘である。

(4) 玉腰芳夫(1980)『古代日本のすまい』建築的場所の研究、ナカニシヤ出版。

世間の 繁き仮廬に 住み住みて 至らむ国の たづき知らずも (萬葉集 卷16・3850)

家も仮廬であり、住む、家に留まるという事態も何程の事もない、ただ仮のものにすぎぬというのである。それは、個々の仮廬ではなく、「住み住みて」というトータルとしてのこの世の虚仮観であって、絶対的静止としての大地の否定であり、絶対的この否定でもある。(p47)

『萬葉集』においても、「住み住み」と言葉が重ねられている。玉腰は「虚仮観」として説明する

- が、本稿での独自の視座から捉えると、「住まうこと」に「住む」ともいえよう。
- (5) ウーテ・グッツォーニ／米田美智子訳(2002)『住まうこととさすらうこと』晃洋書房。
私たちのことをさすらう者と理解するならば、住処は道へと開かれる。そして道そのものが私たちの住処になり、内と外は互いに交錯し、芭蕉が語っているように、旅することそのものが私たちの住処となる、(p3)
住まうこととさすらうことを一つに引き合わせるの、両者が共通の空間を占めていること、すなわち世界を共有していることである。(p6)
- (6) 市川秀和(2014)『「建築論」の京都学派 - 森田慶一と増田友也を中心として -』近代文藝社。
武田五一や森田慶一を初発とし、増田友也を経て現在まで連綿と続く建築論の系譜がある。
田中喬や玉腰芳夫もこの流れの只中にあったことはいままでもない。
- (7) 増田友也(1987)『家と庭の風景』ナカニシヤ出版、p8。
- (8) 田中喬(1992)『建築家の世界』ナカニシヤ出版。以下の本稿では、同書からの引用頁のみ記す。
- (9) 『広辞苑』第7版 岩波書店、2018年。
・漂泊 ①流れただようこと。 ②一定の住居または生業がなく、さまよい歩くこと。
さすらい。 奥の細道「片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」。
・放浪 さまよい歩くこと。さすらうこと。「諸国を放浪する」「放浪生活」
- (10) 『角川 新字源』改訂版33版 角川書店、1999年。
・漂 水にうきただよう意を表す。
・放 人を追いはらう意を表す。
- (11) 橋本政宣(1999)「橘曙覧の「阿須波山にすみけるころ」考」『鯖江郷土史懇談会』会誌 No.7。
時期については諸論あるが、天保10年、28歳とするのが妥当ではないかとする。
- (12) 水島直文・橋本政宣編注(1999)『橘曙覧全歌集』岩波文庫。
和歌の近代化を推進した正岡子規(1867～1902)により(中略)「趣味を自然に求め、手段を写実に取りし歌、前に万葉あり、後に曙覧あるのみ」(中略)とまで絶賛された。(解説 p389)
曙覧の歌が、中世以来の伝統的な詠風を打ち破って近世の歌壇に新しい歌風を樹立し、明治の和歌革新運動の先駆をなしたと評される所以である。('独楽吟'について 解説 p390)
- (13) 福井市橘曙覧記念文学館(福井市足羽)が中心となって、「たのしみは〜とき」という作歌を毎年広く募っており、現在までこの形式が一般に詠み継がれている。
- (14) 同じく福井市橘曙覧記念文学館の2階には、この「藁屋」を復元したものが公開されている。
- (15) 佐竹昭広校注(1989)『方丈記』新日本古典文学大系39、岩波書店。
今、サビシキ住マヒ、一間ノ菴、ミヅカラコレヲ愛ス。自ヅカラ都ニ出デテ、身ノ乞匄トナレル事ヲ恥ヅトイヘドモ、帰リテコ、ニ居ル時ハ、他ノ俗塵ニ馳スル事ヲアハレム。(p27)
山中にある方丈とされる小さな仮の住まいであるが、「住まい」の内と外という自らの身の置き所によって、その心性の反転をみることができるのである。
- (16) 田中喬 前掲書(8)
風景に生きた良寛は、天なる風光のもと、地なる風土にふれて生きたのである。風光・風土の間こそが、端的に、宿り住むべき、住合うべきところであったと言われてよい。(p145)
ウーテ・グッツォーニ 前掲書(5)
地と天のあいだに、誕生と死のあいだに、喜びと悲しみのあいだに、行為と言葉のあいだに人間が滞在するという意味での、住まうことの基本的特徴をとどめている。(p5)
- (17) たとえば次の句などから、家族があったのではないかと推測されている。
遣るあてもなき雛買ひぬ二日月(春・103)
妻持ちしことも有りしを着衣始(新年・1259)
また、出身とされる長岡藩は、戊辰戦争以来新政府軍と戦い、壊滅状態となっている。

- (18) この芭蕉の「幻住庵記」については、香西克彦がすでに「風景論」として取り上げている。
香西克彦(1994)「芭蕉の風景 —『幻住庵記』にみる風景の構造—」日本建築学会計画系論文集 455号。
- (19) 下島勲・高津才次郎編(2018)『新編 漂泊俳人 井月全集』井上井月顕彰会。
略伝等は同書を基にしている。(なお書名が、奥付では「漂浪俳人」となっている。)
- (20) 復本一郎編(2012)『井月句集』岩波書店。
自己韜晦の漂泊俳人井月が誕生したのは、文政5年(1822)のことである。文政10年(1827)、65歳で没した一茶は、この年、60歳である。井月が没したのは、明治20年(1877)。享年66。
俳句革新を成し遂げた正岡子規は、慶応3年(1867)の生まれ。明治20年(1877)には、21歳になっていた。(解説 p323)
- (21) 早川漫々『俳諧発句雅俗伝』(文政8年)を、井月が再構成したものとされている。
- (22) 「窓」を通した風景の建築論的考察については、次の一連の研究論文がある。
香西克彦(2003)「「まど」という現象 —「まど」に関する風景論的考察 I」
日本建築学会計画系論文集 第567号。
同 (2003)「「まど」という場所 —「まど」に関する風景論的考察 II」
日本建築学会計画系論文集 第570号。
なお上記論文においても、井上井月の発句が取り上げられている。
- (23) 俳号の「井月」とは、四角い月という意味であらうとされる。この世にあらざるものという意味も含まれているのかも知れない。芭蕉の句「わが宿は四角な影を窓の月」(貞享元年)と関係があるのではないかと推測している。
- (24) 井月の墓といわれる楕円形の句碑には「降とまで人には見せて花曇(春・60)」が刻まれている。
昭和14年、種田山頭火がここに辿り着き、偲んで句を詠んでいる。
- (25) 氣多雅子(1992)『宗教経験の哲学』創文社、p134。

図版出典

- 図1 福井市橘曙覧記念文学館編『橘曙覧入門』(2007年 第三刷) 越智通兄画。
図2 下島勲・高津才次郎編『新編 漂泊俳人 井月全集』井上井月顕彰会(2018年 初版) 橋爪玉斎筆。

付記：本稿は、日本建築学会近畿支部研究報告集 第60号・計画系(2020)、および、日本建築学会大会(関東) 学術講演梗概集(2020)に、個々に掲載されたものを、大幅に加筆・修正し、まとめたものである。

なお、以下の2書も井上井月の評伝について、参考にした。

- ・伊藤伊那男(2014)『漂泊の俳人 井上井月』角川学芸出版。(俳句ライブラリー)
- ・江宮隆之(2001)『井上井月伝説』河出書房新社。(人間ドキュメント)